近藤重蔵の業績とその顕彰

国後・択捉や蝦夷地の探検者として知られる近藤重蔵（1771～1829）は、江戸幕府に仕える役人でしたが、文政9年（1826）、56歳の時に、息子が殺傷事件を起こしたことで、その監督責任を問われ、大溝藩にお預けとなりました。その後、文政12年（1829）6月9日に逝去するまでの約2年間を、大溝城下の幽閉先の屋敷（大溝陣屋総門の南隣）で過ごしました。

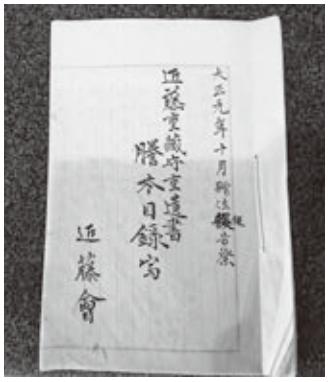
文人としての活躍

江戸で生まれた重蔵は、幼い頃から学問に励み、17歳の時に「白山義学」と名付けた塾を設立して、近隣の子弟を教え始めました。24歳の時には、幕府に長崎奉行手付出役として登用され、海外事情に精通するようになり、『安南紀略』等の書物を著しました。重蔵は、この後も多くの書物を著し、後に大溝城下で幽閉生活を送った間にも『江州本草』という本草学の本を書いたことが伝わっています。

寛政10年（1798）から文化4年（1807）の間の5度にわたる蝦夷地探検時には、現地の詳細な調査記録を残しています。現在その記録は東京大学史料編纂所が所蔵しており、『大日本近世史料』のうちの「近藤重蔵蝦夷地関係史料」として刊行されています。

業績の継承と顕彰

お預けの身として生涯を終えることになった重蔵ですが、明治時代になると、北方探検等の業績が改めて見直され、明治44年（1911）には、政府から重蔵に正五位が贈られました。これに先立ち、大溝町では重蔵の遺品の管理と業績の顕彰を目的とする「近藤会」が設立されました。なお、この会の役割は重蔵の150回忌にあたる昭和56年（1981）に新発足した「近藤重蔵翁顕彰会」に、現在も引き継がれています。


近藤会目録

重蔵の墓所は、勝野の瑞雪禅院の裏山にあり、正五位が贈られた明治44年に、大規模な改修整備が行われました。翌大正元年（1912）には、墓所の近くの大溝尋常小学校で贈位報告祭が行われ、滋賀県知事、滋賀県教育会長、大溝町長らが参列しました。当時の新聞によると、報告祭に併せて重蔵の遺品や遺墨の展示会が開催された他、県教育会主催の記念講演会が行われ、小川琢治京都大学教授が重蔵の業績について講演を行いました。

資料館での展示

顕彰会が保管してきた重蔵の遺墨や遺品は、現在、高島市に寄贈され、高島歴史民俗資料館の収蔵庫で保管されています。資料館では、重蔵が亡くなった6月に、遺品の一部や重蔵の業績を紹介する展示会を開催しています。（本年度の展示については、26ページの文化情報ともしび参照）

近藤重蔵の墓

問 文化財課 ☎（25）8559

編集雑感

広報たかしま6月号はお楽しみいただけましたか？

私は、この6月号から広報誌制作に携わることになりました。皆さんに情報をお届けする大切なツールである「広報たかしま」。

まだまだ慣れないことだらけで、締め切りに追われる日々でしたが、何とか完成することができました！！少しでも多くの方に広報誌を読んでいただけると制作側も嬉しいので、これからも毎月、欠かさずチェックしてください。（K）

広報たかしま 令和3年 6月号 No.257
発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。